

魔法のプリンセス
アリス
聖姫獣姦

大杉和馬

表紙イラスト：イテナオ



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法のプリンセス アニス 聖姫獣姦』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法のプリセス
アリス
聖姫獣姦

大杉和馬
表紙／イチナ

登場人物紹介

Characters

アニス・シムライト・リティアーク

魔法の国のプリンセス。負を浄化する使命をおびて地球にやってきた少女。心優しく天真爛漫で活発、純粋な性格のためか美しい容姿のわりには幼い印象をあたえる。

レイム

代々王家の人間を守護する幻獣で、圧倒的な魔力を持っている。現在は、少々口うるさいアニスのお目付役。

そこは街の一角、裏通りの僅かに開けた薄暗い空間。広場と言うには狭く、雑多なごみや物が転がる廃棄場の様な、明らかに住人に見捨てられた場所だった。

普段人気はなく、薄暗く、不潔で怪しげな異臭さえ漂う場所は、だが突如として不思議な光輝に包まれる。

その光の中を何かが踊っていた。

ツインテールに纏められた空色の髪が暗れ渡った青空の如く輝き、舞にあわせて軽やかに宙を踊っている。汗を弾いて輝く滑らかな肌は生氣に満ち溢れ、長い両脚で軽やかなステップを踏む姿は元気な小鹿のようにも見える。

「ルウツリラァ♪ ルウルリラァ……♪」

少女の歌声が心地よく耳に響く。聞いただけで声の主の明るい性格が窺えるような、榮しげな、そして陽気な歌声。そう、踊っているのは誰もが見惚れる程に美しく若い少女だった。

ツンと高くはねた鼻梁は形良く整えられ、小さな口元では瑞々しい唇が輝いている。引き込まれる様な双眸は明るい空の色に煌めき、少女の表情を絶えることのない陽気な笑顔とともに美しく彩っていた。

色も鮮やかなワインレッドのミニスカートに、クリーム色の半袖のドレスシャツ。その上から淡いピンクのベストを羽織っており、動きやすさを重視したその衣装からも活発な

少女であることが窺える。短い袖から伸びる細く柔らかな二の腕のラインや、元気よく跳ねる度に翻るスカートのエッジから覗く健康的な太ももが目にも眩しい。

タンツ、タンツ、タンツタツタン!!

軽やかなステップに、楽しげな歌声、弾けるような笑顔は、ただ眺めているだけで身体の底から元気が溢れてくるようで、少女の踊る舞を美しく魅せつける。華やかな舞台もなければ、満員の観客もない。だがそこはたしかに彼女が主役の舞踏会だった。

「ランツラリラアア〜♪ ルウルイリイアララツ……」

心の底から楽しそうに口ずさむ不思議な韻を含む音節も、その舞のためだけに用意された歌詞のようにぴたりとマッチしていた。

古典の舞踊の様な堅苦しさはなく、だからと言って娼館のダンサーの様に媚も売らず、まして軽薄さなど微塵もない。神に捧げる神楽のような厳かさや神聖さ、子供が気紛れで踊る遊戯の様な楽しさと陽気さ、相反するいくつもの要素が踊り続ける少女の魅力のもとで完璧に統合されていた。

少女が手にしたステッキが不思議な光の粉を舞わせながら、指揮棒の様に宙で円を描き、星粒となった光が美しく闇に螺旋を描く。歌と舞はそれぞれ欠くことのできない比翼の鳥の如く補いあい、高めあい。神代の舞を思わせる至高の円舞はしかし、唐突に終わりを告げた。

「僕の中の魔法の力よ。どうかこの子たちを治してあげて」

明るく陽気な声音が切実な祈りにも似た真剣さを帯び、慈愛に満ちた願いとなって紡がれる。ガラスの鈴の音の様な透き通った声音で、詠うように不思議な言葉が紡がれる。

光が弾けた。まるで夜空に突如として咲いた極光オーロラの様に、幻想的な七色の光の柱が少女を中心に夜空へと真つ直ぐに立ち昇る。同時に光の柱を中心に爆発するかのようには、激しい光が宙を乱舞し、ゆっくりと四方へと広がっていく。光の奔流は街の一角に留まらず、大通りや、繁華街、住宅地域にまで及び、まるで光のドームの様に街全体を包み込んでいった。

ザワザワザワザワ……。

自然ではあり得ない不可思議な光の超常現象。だがそんな不可思議な光景に街の住人たちが気づいた様子は微塵もない。まるで何事もなかったかのように遠くから響いてくる雑踏の喧騒がやむ気配はなく、普段と変わらない騒がしさと日々の営みを夜の街で紡いでいく。

「ふう〜っ……」

ステッキを握った手の甲で額の汗を拭う少女の周囲に、星が降るかのように光の粒が舞い降りる。世界が少女を祝福するように、あるいは感謝するように、無数の蛍火が舞うさまは一種幻想的と言ってよいほどに美しい輝きを放つ。

その光の渦の中心に立つ少女の姿は、周囲の幻想美に霞むどころかいつそその中であつて一層際立ち、神話の女神を描いた一枚絵の如き美しさを醸し出していた。

「はああ、もう疲れたよお」

光が消え去つたのを確認すると同時に、気の抜けたような声が少女の口からため息とともに漏れでる。同時に、それまで気品さえ感じさせる凛と輝いていた美貌がふにやりと崩れ去ると、ぺたんかと尻餅でもつくようにその場に座りこんだ。

「こおらあ、だらしがないぞ。アニス!!」

いまにも背中から倒れこみ、地面で大の字になつて寝転びそうなお行儀の悪い少女を姿なき声が叱咤する。いや、姿が見えないわけではなかつた。少女の傍らに在る淡い光の輝き、そのバスケツトボールくらいの大きさの光の玉は、まるで滑るかのように宙を舞うと少女の顔の前で明滅する。

ポーン!!

軽い爆発音とともに光が弾けると、その中からは蒼い鳥の様な生き物が現れた。鳥の様などは言つても、便宜上そう比喻せざるをえなかつたというだけの話だ。翼があり、くちばしがあり、まあたしかに外見は鳥類との共通点が多いと言えるだろう。

だが、実際にこの様な鳥が自然に存在するとは思えなかつた。三頭身の寸胴な体形に比して翼は飾りと言つてよい程に小さく、とても飛翔の役に立つとは思えない。にもかかわ

らず宙を軽やかに舞い、ぬいぐるみじみたコミカルな姿に反して、大きくつぶらな瞳には深い知性を宿し、何より人語を解してしゃべるなど尋常な生き物ではない。

「むう、レイムは厳し過ぎるよお」

だがそんな生き物を前にしても少女に怯えた様子も警戒した様子もなかった。むしろその得体のしれない小動物に親しげに、そして不満そうに尖らせた唇を向けて何やら文句を言っている。

頬を膨らませ、不満を訴えかける少女の表情は年相応で、そんな子供っぽい仕草さえ彼女の魅力を損ねることはない。凜と引き締まった決意の顔と、あどけなさの残った天真爛漫な笑顔、やや不貞腐れた不満顔。ころころと万華鏡のように変わる表情が、ともすれば氷の如く感じさせる白亜の美貌に春の日差しの温もりと親近感を与える。

「それはオイラが厳しいんじゃないやなくて、アニスが気を抜きすぎなんだよ」

その小鳥の様な生き物は、まるで人差し指を立てる様に翼を立ててアニスと呼ばれた少女に何やら説教をしているようだ。酷く人間臭い仕草にくりつとした大きな瞳、愛嬌のある顔立ち、どこかマスコットの様な印象を受ける生き物だった。

だがその愛くるしくも無力な姿を侮ったものは痛い目を見ることになる。その使命は、本来の姿と力を隠蔽し、いざ危険となれば守護するべき対象をその強大な力をもって守ることにある。ある王国に代々仕える守護の獣、それがこの小さな生き物の正体だった。

「あうっ!!」

背中から地面に叩きつけられ、アニスが苦悶に仰け反った。地面で背中を強く打ち、息が詰まり、苦しさに僅かな身動きもできなくなる。

そんなアニスの身体の上に、漆黒の獣が覆いかぶさってくる。アニスの細い両腕は獣の前肢に押さえ込まれ、逃れようにも圧しかかってくる獣の体重は少女の細腕の反抗程度ではびくともしない。魔法の国の王女は、まるで罪人の様に地面に十字に磔られてしまった。

「ふ、ふひひひ、む、無駄なんだな。も、もうアニスちゃんは、囚われのお姫様な、なんだな」
「アニス!!」

そんな王女の姿を見て黒い霧に掬め捕られた守護獣も、必死に拘束を振りほどこうと足掻くが、実体のない霧はまるで鋼の鎖のようにびくともしない。

「うっ、つくっ、放して……放してよ!!」

両腕にかかる獣の重さに顔を顰めながらも、少女の瞳が己を押さえつける獣の醜貌を見上げる。丁寧な口調とは裏腹に、その青い瞳は気丈さを失わず、声にも、表情にも怯えた色が見当たらない。王女としての気品、気高さ、そして何より意志の強さが、その目と表情から微塵も翳ることなく窺えた。

「キヒヒヒ、なんとも元気な強い娘じゃわい」

少女の反抗的な態度に漆黒の獣は怯んだ様子も、怒った様子も見せない。自分を鋭く見

返す凜と輝く瞳を覗き込み、獲物の活きのよさをむしろ喜んでいた。

「美しく、気高く、何よりも気丈じゃな。まだまだ女としては青いとはいえ、さすがは魔法の国の王女様といったところかのう」

自分を見下ろす獣の瞳に宿る侮蔑の色に怯むことなく少女は、その深紅の瞳を睨みつける。世界に満ちる負の気を浄化するという王女の使命感。魔法の国と人間界の双方を守りたいと願う少女の優しくも強い心は、一度や二度の失敗程度では挫けることを知らない。

「僕はぜ、絶対に……、絶対に君だつて救つて見せるんだから、くつ、み、見てなさいよ」身を振り、動かない両腕に必死になつて力を込めながら、自分を痛めつける相手さえ救つてみせると宣言する。しかし漆黒の獣はそんな優しさにも心動かされた様子さえない。

「グフフツツ、そうか、そうか。それは楽しみにさせてもらうぞ。じゃがのう。今はワシ自身がお前の身体で楽しませてもらおうかのう……」

「え……？」

不穏な言葉に宿るおぞましい欲望の響きに疑問を返す暇さええない。自分の顔を覗き込む獣の右の頭が近づいてくる。鼻にかかる生臭い獣の息、目の前に迫る犬の様な長い口は避ける暇さえなくアニスの唇に覆いかぶさった。

「——ッ!?」

最初、それが何を意味するのかわからなかった。鼻を衝く獣の異臭、目前で欲望にぎら

つく赤眼、唇を燃えるような肉の感触が覆う。驚愕に目を開いたまま、アニスは停止した思考で呆然と目の先5センチと離れていない醜い面貌と見つめ合った。

（え？ な、なに……？ ぼ、僕……そ、そんなうそ……？）

凍結した思考がゆっくりと解凍されていくが、悲鳴さえシヨックのあまり出てこない。それは十数年のアニスの人生においての初めての口づけだった。恋人と交わす甘いキスさえ未だ夢見たことのない少女にとつて、それはあまりに凄惨なファーストキスだった。

ズルリ……

「んんん——ッ!!」

奪われたファーストキスの衝撃に浸る暇さええない。硬直した唇を無理矢理割り開き、長い舌がアニスの口内に侵入してきた。いきなり喉奥まで舌を突きこまれ噎せ返る少女に氣遣う様子もなく口腔粘膜を舌で舐めまわされる。

「グッ、ゲホッ、ゲホッ!! ひ、酷い。何を、何をするんだよ!？」

勢いよく首を振って獣の唇を振り払うと、自分のファーストキスを奪った魔物を睨みつける。その瞳の端にはシヨックのあまり涙さえ浮かんでいる。だが魔物はそんな少女の怒りさえ楽しげに、その美貌を見降ろし、嗜虐の笑みを浮かべる。

「くくく、おやおや？ これはいいの。ひよっとして王女様はキスも初めてじゃったのか？」

「くうっ……!!」

凶星を突かれ、羞恥と屈辱に赤らむ頬を隠すように獣から顔を背ける。だがその激しすぎる動揺とショックを隠しきることはできない。瞳の端に浮かんだ悔し涙を魔犬はからかうように舐め上げる。

「このっ!!」

キッと、そんな獣に対し、王女は怒りに青い瞳を燃やすと、強い眼差しで獣を睨みつけた。少女に宿る気品と高貴さがその視線に宿り、怒りが魔獣を刺し貫く様だった。臆したかのように魔獣の頭が後ろに退き、王女の怒りは不埒な魔獣を撃退したかに見える。

「ううん!!!」

だが、魔獣の右の頭に気を取られていたアニスは逆から迫るもう一つの首に気づくのが遅れた。再び塞がれる唇、喉奥にねじ込まれる舌に、アニスの小柄な身体が勢いよく仰け反る。

「フヒヒッ、チュウ、アニスちゃんの唇は柔らかくて、あ、甘いんだな。せ、セカンドキスもいたただき、なんだな」

「やあつ、ん、ちゅっ、このっ、汚……んんうっ!!」

屈辱の言葉に怒りを燃やし、再度首を振って逃れようと足掻くが今度の首は執拗にアニスの唇を追ってくる。唇の中に差し込まれた獣の舌は長く、どれほど首を左右に逃そうと

も彼女の口腔を舐めまわす舌から逃れることはできない。

「んっ、ぐううううっ!!」

(喉に……舌が入って……くる)

舌先に喉奥を深く貫かれ、全身が痙攣し、背中が勢いよく跳ね上がった。もはやキスなどという生易しい行為ではない。舌によるレイプそのものといった感じの口唇が、先ほどまでフレンチキスさえ初めてだった王女の口内を思うがまま蹂躪する。

歯茎がねっとりとして舐めまわされ、健康的な真珠色の歯が汚らしい獣の唾液で汚される。アニスの唾液を強く吸い上げられ、喉奥に舌先が遠慮なくねじ込まれた。長い獣の舌は蛇が獲物に巻きつくかのように少女の舌を絡め取り、舌全体を舐る様にウネウネと蠢いている。

「はあ……んっ、ぐっ。苦しい……ちゅっ……も、もう息が……っ」

相手のことなど微塵も気にしない口腔レイプに快楽などあるわけではない。それどころか流しこまれた獣の唾液に呼吸を堰き止められ、アニスは酸欠寸前にまで追い詰められていく。

吐き出したくても獣の口と舌に唇を塞がれ、それも叶わない。だが獣の汚らわしい唾液を飲まされるなど、潔癖な少女にはとても許容できることではなかった。鼻で懸命に息をしようとする少女に業を煮やしたのか、暇を持て余していた右の頭が彼女の形よい鼻をその口先で器用に摘みあげる。

「……っ!？」

牙を立てない甘噛み、そこに痛みなどない。だが、完全に呼吸を堰き止められてしまったアニスにとつて、それは何の慰めにもならなかった。

(く、苦しい……でも、こんなの……飲みたく……ない……)

呼吸困難による苦しみと、死の恐怖に彼女の心は必死に抗う。だがどれほど我慢しようとも、どれほど少女の意志の力が強くとも、酸素を求める肉体の要求を無視することなどできない。

ゴクリ……。

アニスの喉が鳴り、汚らわしい獣の唾液が喉を通り、食道を滑り落ちていく。酷く生臭く、ぞつとするほどに粘度の高い液体に、急速に吐き気がこみあげ、喉が痙攣を繰り返す。だが一度嚥下してしまえばもう後は止まらない。必死に酸素を求める身体は、口いっぱい溜まった唾液を次々と食道に流しこみ、胃にため込んでいった。

「ゲホッ、ゲホッ、はあ、がハッ、ひッ、ハアっ!!」

ズルリと引き抜かれる様な感覚とともに、舌が口内から出ていく。激しくせきこみながら酸素を求めて喘ぐ王女を見下ろしながら、彼女のファーストキスとセカンドキスを奪った魔獣は楽しんで舌なめずりをしている。

「どうじゃの？　ワシらの唾液の味は？　存外に美味しいものであろう？」

溢れそうになる便意を堪えた。

「ど、どこを、いったいどこを舐めてるんだよ!!」

お尻の穴を舐められるなど想像もしたことがなかった。排泄のための器官を他者に舐められる背徳感とおぞましき、そして凄まじい便意に責め苛まれる。

「ウ、ウヒツ!! アニスちゃんのお尻の穴、か、可愛いんだな。レロツ!!」

「んあああつ!! そんなの舐めないで!! ひつ、や、やだあああ!!」

皺の一本一本を伸ばす様に丹念に舌を這わされ、窄まりの中心を舌先で穿られた。その度に腰が砕けそうになり、必死に締めた括約筋が緩んでいく。逃げようにも荒れ狂う便意で這うことも、起き上がることもできず、それでも突き上げた尻を左右に揺すって犬の舌から逃れようと足掻く。

ププツ……。

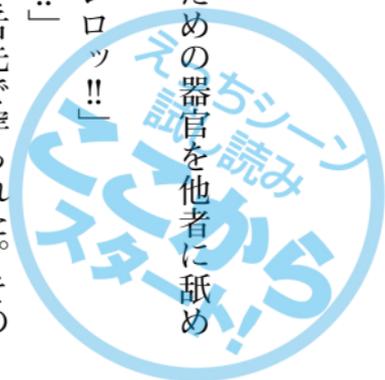
「ひゃあああつ、やらあつ!! だ、だめ……だめえええ!!」

可愛らしい異音とともに思わず漏れそうになる排泄物に、アニスは差恥のあまり甲高い悲鳴を上げた。

「おうおう、可愛いオナラじゃのう。ずううう、おおお、匂いの方も芳しい」

「アニスちゃんのあ、味がするんだな。美味しいんだな!!」

（そ、そんな……ぼ、僕の……オナラの匂い嗅がれて、汚いものを舐めて……う、嘘だよ



……)

だが、そんなオナラを肺いっぱい吸いこみ、僅かに漏れた排泄物まで舐めとられ、何やら興奮し、賞賛している変態犬の言葉に、寒気が走る。あまりにもおぞましい行為、背徳的というも生温い魔犬の変態行為に潔癖なアニスの肉体と精神が追い詰められていく。尻孔をくすぐられる度にぞわぞわと得体のしれない悪寒と電流が背筋を駆け上がり、冷やされきったお腹の中で膨れ上がる便意に息も満足につけない。

「ふむ、そろそろじゃの……？」

老人の呟きとともに、便意に苦しみ悶える少女に、さらなる淫虐が襲いかかった。お腹の中を支配していた氷点下を思わせる冷気が、火傷しそうなほどの灼熱へと一気に反転した。先ほどまで散々冷やされてきたお腹が一気に熱を帯び、そのあまりの落差に悲鳴を上げる。

「ひぐうあっ!?!」

その全身を覆うのは熱さだけではない。脈拍が異常に早くなり、それに合わせて全身を駆け巡る血流がその勢いを増す。呼吸が荒く乱れ、雪の様な肌が紅潮し、全身にうっすらと汗が滲む。お腹の中が、いやお尻の中が燃えるように熱い。

(な、なにこれ? い、いったい何が? 身体が燃えるよ。お、お尻が……熱いよお)

お腹の中で吹き荒れる便意さえ、一瞬忘れてしまうほどの灼熱感に、アニスは激しく戸

惑い、混乱する。だがその灼熱感がアニスにもたらしたのは不快感だけではなかった。

フウウ——ッ。

「ひいきやあああつ!!」

熱に浮かされた顔で荒い息を吐く少女の尻の谷間に、真後ろから吐息が吐きかけられる。たったそれだけのことでアニスは雷に打たれたかのように全身を痙攣させた。爪先が伸びびあがり、ガクガクと両脚が震える。両脚の間からポタポタと恥ずかしい雫が零れ落ち、地面に小さな水溜まりを作った。

生暖かい風がただ菊座を撫でただけ、たったそれだけのことでアニスは軽い絶頂に達してしまったのだ。信じ難いほどに神経が過敏になってしまっている。それもアニスにとつて最も恥ずかしい場所が、排泄のための場所の神経が、風が撫でるだけでイキ狂いそうになるほど鋭敏に研ぎ澄まされていた。

「ぼ、僕の身体に何をし……ひぐうっ、もうやめてええええ!!」

吹きあがる便意に括約筋を締めようと息むだけで背筋を桃色の電流が駆け巡る。それでも辛うじて漏らさなかつたのは奇跡に近かつた。全身はおこりがかかつた様に痙攣を繰り返す、太ももを耐えず愛液が伝い落ちていく。まるで男を誘うかのようにユラユラと揺れる淫卑な腰の動き、淫らなダンサーの腰振りを見るようだった。

便意が吹き出し、それを我慢しようとする度に快楽に身悶え、さらにそれが便意を呼び

起こす。まさに地獄の連鎖と言つてよかつた。

「い、いやだよ。こ、こんな僕……うぐう、おなかつ、苦しい……息が……できな……あぐつ」

地鳴りの様な音が少女のお腹の中から響き、猛烈な便意がお腹の中で荒れ狂つていた。腹筋と括約筋が絶えず痙攣を繰り返し、それがさらなる甘美な愉悅を呼び起こす。褐色に染まった拳を血の気が失せるほどきつく握りしめ、額にはびっしりと脂汗が滲んでいた。

この場を逃げ出そうにも、僅かでも身動きしようものなら便意が暴れだし、その度に全力を振り絞つて便意と快楽を堪えなければならなかつた。だがその驚異的な忍耐もすでに限界を超えてしまつている。排泄姿を晒したくないという乙女の羞恥心と、王女の誇りから地獄の様な苦悶に耐え続けていたが、結局それは先の見えた勝負だ。どれほどに強固な精神をもつてしても破滅の瞬間を僅かに先延ばしすることしかできない。

「な、何とかしてあげてもいいんだな……」

そんな絶望に震えるアニスの前に、するりと救いの手が差し伸べられた。もしも冷静な時であれば気づけただろう。それが罠だということを、そしてその優しい声を発した相手が邪悪な笑みを浮かべていることも……。

「そうじゃのう。ワシらに懇願してみるか？」

「うっ、ひあつ、お、お願い……。た、助けて……」

屈辱の提案、だが今のアニスにそんなことを氣にかける余裕はない。この地獄の苦しみと、耐え難い羞恥から逃れられたい一心で、その悪魔が差し伸べた手に縋ってしまった。「ウヒツ、い、いいんだな？ アニスちゃんのウンチが漏れないようにすれば、い、いいんだな？」

ゾロリと舌なめずりする音が聞こえそうなほど、邪悪な愉悅と欲望に染まった笑みで魔獣が尋ねる。その声音の不気味さに僅かに浮かんだ疑問さえ、お腹から轟いた異音を前に消し飛んだ。

「お、お願いだよ!! ぼ、僕……も、もうウンチ漏れちゃう!! あぐうつ、な、なんとかしてえっ!!」

目をギュッと閉じ、懸命に食いしばった歯の隙間から叫ぶように懇願する。怖かった。漏れそうになる苦悶が薄れていくことが、真っ赤に燃えあがった肛門粘膜がその度に得体のしれない電流を発することが、もう言葉なんて選んでいる暇はなかった。この苦しみと葛藤を何とかしてくれるならその相手は誰でもよかった。手段さえ問わなかった。

「ひよひよひよつ、お姫様じきじきのお願ひでは仕方がないのう」

その言葉を聴いた魔犬は満面の笑みを浮かべると、アニスに氣づかれないうようにそつと、ペニスの先端で狙いを定めた。

「も、もう大丈夫なんだな。アニスちゃんは力を抜いても大丈夫なんだな」

そつと耳元で囁かれる甘く優しい言葉、それはアニスが待ち望んでいた言葉だった。もう我慢しなくてもいい。力を抜いてもいい。それは心身ともに疲れきった少女にとってあまりにも甘美な誘惑だった。ふつ、と緩んだ緊張感、弛緩する筋肉、その言葉の意味を確認することすら考えられず、アニスは悪魔の言葉に従った。

ソブリッ!!

その刹那、アニスの全身から完全に力が抜けきった瞬間を見計らい、魔犬のペニスが少女の浣腸で緩んだ肛門へと潜り込んでいた。

「ああああああああ——つ!!」

アニスらしからぬ獣じみた絶叫が唇から放たれる。油断しきっていた精神と肉体への不意打ち。弛緩しきっていた肉体は抵抗もできずに、獣の剛直をねじ込まれる。決壊しようとしていた堰が無理矢理こじ開けられ、噴き出そうとしていたものが無理矢理に押し戻され、灼熱した腸を逆流した。

「ひきい、やつ、はあつ、ひくううううう——ッ!!」

一瞬、身体が真つ二つに裂かれるのかと思う衝撃と痛みが脳天まで突き抜け、瞬時にそれが快楽へと転じた。括約筋を割り裂き、異様に細長いペニスが肛門粘膜を抉りながら、どこまでも深く突き進んでくる。暴力的な肉の塊、その幹にびっしりと生えた瘤がこりこりの中を刺激しながら進む度、お腹の中で爛れた愉悦の爆竹がいくつも爆ぜる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>